彼方【かなた】

校長通信
H24.7.20
Vol.18

【終業式で伝えたかったこと】

本日をもって一学期の授業を終わります。夏休みは、自分で生活づくりをしなければなりません。充実した夏休みを送ってください！

さて、各学年の代表者の「振り返り」を聴かせてもらいました。それぞれ、頑張れたこと、課題として夏休み以降に取り組むべきこと、個人でやるべきこと、みんなと一緒に助け合って取り組むべきことをしっかりと反省できていたと思います。

一年生代表の齋藤くんの発表の中に、「駅伝の練習はきついけど、みんながいるから頑張れます！」というのがありました。

そこでみなさんに質問です。一学期の始業式で私は、皆さんに学校教育目標のお話をさせてもらいました。覚えていますか？「自主貢献」です。意味は分かりますか？「自分から行動し、助け合える生徒になろう！」です。齋藤君の言葉がまさにそれです。みなさんは、今学期を振り返ったとき、自分から誰かのために行動し、助け合って生活しましたか？

「いじめのアンケート」を実施しました。「私の学級にはいじめはありません！」という結果が出たのは、ひばり学級を含む十六学級中、二学級でした。その二学級は、三年三組と四組です。さすがは三年生です。感心しました。

でも、私は、この二学級だけがすごいとは思っていません。なぜなら、「うちの学級は、一学期は何人かいじめにあっていると答えた人がいたけど、今はもう誰もいじめられていません。みんな助け合って生活しています。」という具合に学級の課題を解決できることが大切だからです。

今回のいじめアンケートでは二十六人の仲間がいじめられていると答えてくれました。いじめは人権侵害です。絶対に許されることではありません。相手の存在を否定する行為です。泉教頭先生は「死ね！」「殺す！」「うざい！」「きもい！」という言葉を見たり聞いたりすると身震いするぐらい本当に腹立たしくなるそうです。教頭先生に限らず湖北中の先生方はみんな同じ気持ちです。

二十六人に共通しているのが、嫌なことや悪口を言われる、陰口をたたかれるといった言葉の暴力に泣かされていることです。言葉は言霊です！力を持っています。使い方を間違えると相手に深手を負わせます。心の傷は、血が流れません。それだけにやっかいです。大津市の中学校二年生の問題もそうです。心に大きな傷を負っているにもかかわらず、他の人にはその大きな傷が見えないのです。でも私たち人間は、練習をすれば「心の目」で見ることができます。そういう目で周囲を見れば、声を上げられない人のことや傷ついた仲間をフォローすることができます。いや、しなければならないのです！

私たちには、いじめをゼロにする力があります。なぜなら日本は、助け合わなければ生きていけない国だからです。自然災害が多く、天然資源が少ない国だから、みんなで助け合わなければ生きていけない国です。私たち日本に生きる人間は、助け合って

この夏、何人かの先生方が被災地にボランティアに行かれます。昨日は、みなさんが書いてくれた土のう袋を取りに駒崎さんも来校しました。助け合うことを具体的に実践しているすごい人たちだと思います。

私たちは、助け合わなければ生きられない日本に生まれ育ってきたのです。人をいじめている場合ではありません。即刻解決しなければなりません。もし、いじめを受けていてもアンケートにも書けずに嫌な思いをしている人がこの中にいたら、私たちに相談してください。必ず何とかします！沢山の大人が真剣に関わるから大丈夫です！解決するまでサポートします！いろんな方法があります。必ず相談してください。学校中で取り組みます！

いじめ撲滅運動は、湖北中が「伝説の学校」になるために絶対に取り組まなければならない試練です。真剣に「いじめ・不登校ゼロ」に取り組もう！学校に来られない仲間や、教室に入れない仲間が、二学期は一歩前進できるようにみんなで力を合わせて助け合っていこう！みんななら必ずできる！もしできないとしたら、それはできるまでやらないだけ！入学式で話したアフリカの祈祷師のように逃げない自分を作っていこう！

この後の学活でこのことを話題にするのなら、いじめた人は、相手に謝ってしまいなさい。いつまでも引きずらないで今の自分の足元に白線を引き直し、再スタートを切りなさい。そこから素晴らしい自分が必ず生まれます！　期待しています！　以上！